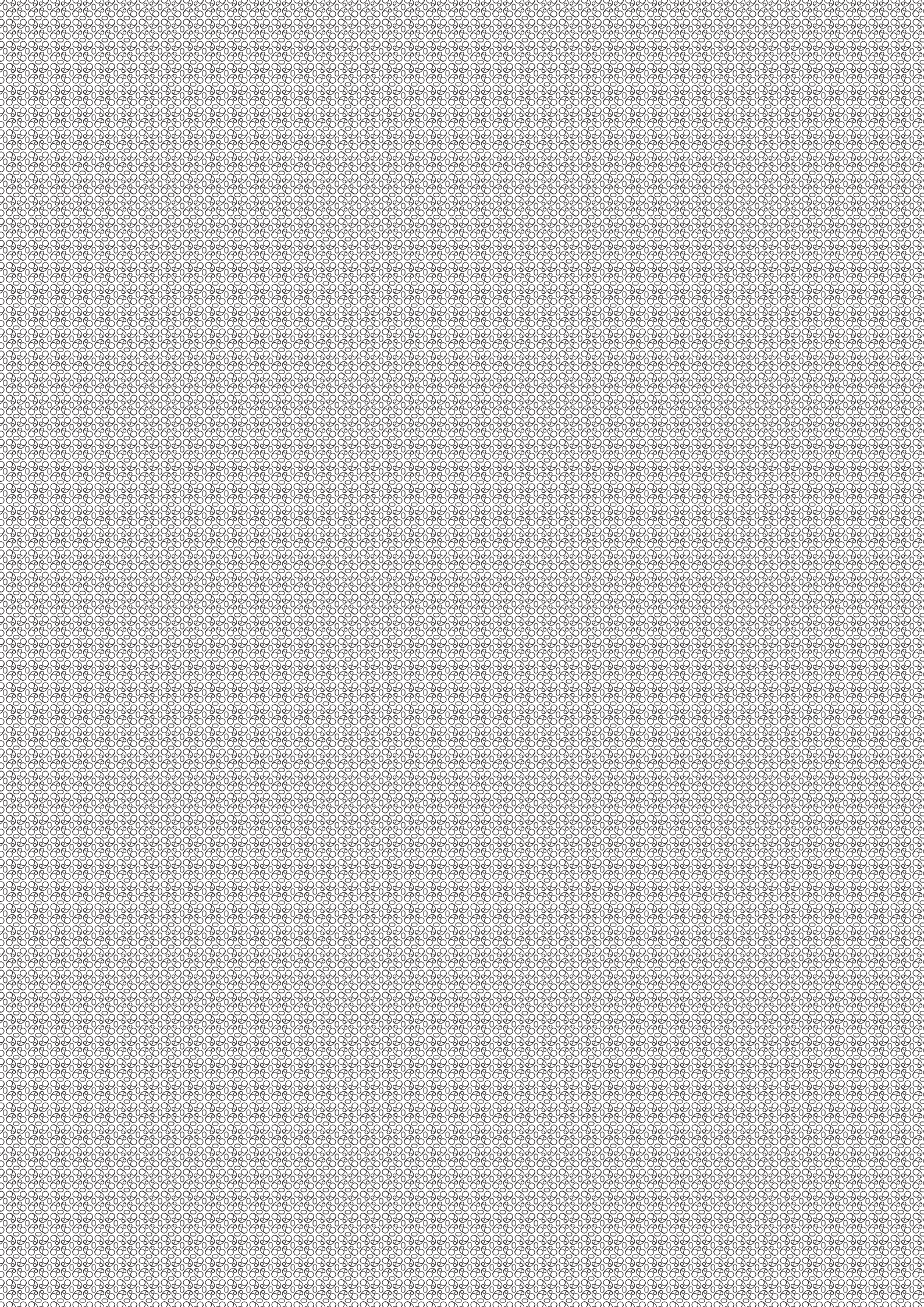


国
語

注
意

- 1 問題は **1** から **4** までで、16 ページにわたって印刷してあります。
- 2 検査時間は五〇分で、終わりは午前九時五〇分です。
- 3 声を出して読むはいけません。
- 4 答えは全て解答用紙にHB又はBの鉛筆（シャープペンシルも可）を使って明確に記入し、**解答用紙だけを提出しなさい。**
- 5 答えは特別の指示のあるもののほかは、各問のA・イ・ウ・エのうちから、最も適切なものをそれぞれ一つずつ選んで、その記号を書きなさい。また、答えに字数制限がある場合には、**や**。**や**などもそれぞれ一字と数えなさい。
- 6 答えを記述する問題については、解答用紙の決められた欄からはみ出さないように書きなさい。
- 7 答えを直すときは、きれいに消してから、消しくずを残さないようにして、新しい答えを書きなさい。
- 8 **受検番号**を解答用紙の決められた欄に書き、その数字の **○** の中を正確に塗りつぶしなさい。
- 9 解答用紙は、汚したり、折り曲げたりしてはいけません。



1

次の各文の——を付けた漢字の読みがなを書き、かたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。

- (1) 憩いいの場所。
- (2) 依頼された仕事を快諾くわんだくする。
- (3) 敵を威嚇いかくする。
- (4) とても羞恥しゆうぢの念にかられた。
- (5) 国会で経済セイサクせいさくについて議論する。
- (6) テイリユウ所じよでバスを待つ。
- (7) 十二月三十一日にジヨヤじよやの鐘を聞く。
- (8) 旅先でイッシュクイッパンいっぴんの恩義を感じる。

2

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。(* 印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。)

水野瀬みずのせ高校三年の巖いわは、かつて野球部に所属していたが、希望していた部長になれず二年生の終わりに退部した。その後、放送部に所属し、赤羽あかば・南条なんじょうらとともに、行事進行の練習と称して野球部と野球部OBの対抗戦を企画し、その進行を担当している。

ウォーミングアップが終わり、再び赤羽さんの声が校庭に響いた。

『お待たせいたしました。水野瀬高校野球部、OBチーム、両チームのスターティングメンバー、並びにアンパイアの紹介をいたします。』

先輩たちがシートノック*を始めた。赤羽さんがメンバーの背番号と守備位置、名前を読み上げる。試合だ、と思ったら背筋に震えが走った。自分が出場するわけでもないのに血の巡りが速くなって、ざわざわと皮膚の下が落ち着かなくなる。

審判は野球部の監督だ。「プレイ」の声がかかって試合が始まる。

先攻はOBチーム。大学名の入ったユニフォーム姿の打者がバッターボックスに立つ。

初球は見送り。二球目はファウル。

そろそろ大きな当たりが来るんじゃないかと息を詰める。

三球目、ストレートを打たれてベンチからわつと声が上がった。⁽¹⁾自分も口を開きかけて、慌てて閉じる。

試合が進むにつれて薄雲の間から日が射してきた。梅雨入りしたばかり

りのこの時期、たまに射す日差しは思う以上に強い。校庭には日差しを遮る陰もなく、南条さんは額の上に掌てのひらを添えて眩まぶしそうにしている。

マイクの音量も問題なさそうだし、南条さんにはテントに戻ってもらい、一人その場に残って試合を見詰めた。やはりと言うべきか、野球部はポコポコに打たれている。OBたちも手加減なしだ。一回の表ですでに四点取られたが、ベンチにいる野球部員たちは全く落胆した顔をしていなかった。むしろ楽しそうだ。

ベンチは二年生が中心だ。高村*たかむらの姿もある。高村はスタメンではなかったが、途中交代もあるだろうか。あいつなら、先輩たちの球も打ち返せるのではないか。

「巖いわはなんでこんなところから一人で試合眺めてんだ？」

突然声をかけられ、しかもそれが覚えのある声だったので、反射のように背筋を伸ばしてしまった。振り返れば思った通り、後ろに谷津先輩が立っている。夢中で試合を見詰めていたせいで、背後から近づいてくる気配に気づかなかった。

谷津先輩は二学年上で、一年のときお世話になった。大声を出すタイプではなかったが、吊り上がった細かい目で睨にらまれると怒鳴られるよりよほど怖かったものだ。

先輩はユニフォームではなくジャージを着ている。今日は試合に参加しないのだろうか。俺の視線に気づいたのか。先輩が踵かかとで軽く地面を叩たたいた。

「ちよっと足首痛めて、今日は見学。」

「怪我けがしてるのに、わざわざ来ていただいてありがとうございます。」

「いいよ、そんな堅っ苦しくしないで。」

谷津先輩は笑って俺に肩をおつける。気安い仕草に驚いた。在学中はあまり後輩と戯たむれるようなタイプではなかったし、一年生に向かって笑いかけることもなかったのに。

「どうした？」

「一年生のときは先輩……めっちゃ怖かったんで、別人みたいで。」

「怖かった？ マジか、よかった。監督からさんざん『お前は気の抜けた顔してるから後輩に舐なめられるなよ』って言われてたからさあ。」

「いや……怖かったっす……。」

先輩は俺の隣に立ち、試合を眺めながらのんびりした口調で言う。

「先輩なんて後輩にビビられてなんぼだからさ。なんだかんだ人間って、怖い人の言うこと聞くじゃん。優しく指導してたらきつい練習とか絶対手え抜くでしょ。強くなってもらうためには、嫌われてもしょうがないと思っ。でもあんまり厳しくし過ぎるとやめちゃう奴やつもいるから、さじ加減が難しくてな。発破かけようとして無茶なこと言ったりもしたけど、巖は文句も言わずに黙々と努力してたから偉かったよな。」

在学中、一度も褒められたことのなかった谷津先輩に褒められて息が止まった。

「……そう、ですかね。」

「一年の中でも特に根性あるなあと思ったよ。いつも最後まで残って、用具片づけて帰ってただろ？」

まさか誰かに見られていたとは思わず、相槌あづも忘れて谷津先輩を凝視してしまった。先輩たちが帰った後、用具を片づけるのは一年生の仕事

だ。俺は片づけを一人で引き受け、他のメンバーが帰った後も今日の練習の反省をしながらバットを振り続けた。努力を続ければ何か変わると信じて、小さな変化が生まれるのをひたすら祈った。

きつと、ささやかな変化はあったはずだ。でも高村のような選手が近くにいたおかげで、自分自身のちっぽけな変化を喜べるだけの余裕がなかった。

焦^{あせ}ってバットを振る自分が、自分でも滑稽に思えた。誰かに見られたら指をさされて笑われるだろうと思っていたその姿を、まさかこんな形で認められるとは。

(2) ずつと力を入れればなしだった肩から、すうつと力が抜けた。

高校時代は一度もレギュラーにはなれなかったし、部長になることも叶^{かな}わなかったし、最後は野球部もやめてしまった。小学校から続けてきた野球にこんな形でピリオドを打って、何も残せなかったとぼんやり思っただけと違^{ちが}うのかもしれない。

少なくとも、鬼のように怖^{こわ}かった谷津先輩が認めてくれたのだ。

それだけで、十分報われた気がした。

グラウンドに歓声^{かんせい}が上がる。野球部がヒットを打った。隣で谷津先輩が「おー、打った打った。」とのんきな声を上げる。

「今日の試合、計画してくれたの巖^{いわ}なんだって？ 放送部として。」

その一言で、ぎくりと背筋^{せきじん}が強張^{こわば}った。

青ざめた俺の横顔を見て、先輩は声を立てて笑う。

「別に野球部やめたからってどついたりしないって！」

「……はい、でも、すみません。」

(3) 「なんで謝^{あやま}るんだよ。いいじゃん、好きなことやってたら。」

先輩が頭の後ろで両手を組む。相変わらず髪は短く刈^かられているが、こちらを見る目は以前より格段に穏^{おだ}やかだ。その目がどこか眩^{くら}しそうで細められる。

「だってお前、まだ高校生なんだから。いいなあ、これからいろいろ選^えべて。」

いいなあ、と、心底羨^{うらや}ましそうな顔で先輩は言った。

でも俺はもう、三年だ。受験まで一年を切っている。そろそろ将来を見据^{みぞ}え、志望大学だつて決めなければならぬ。

日に日に進路が狭められ、崖^{がき}っぷちに立たされているような気分ではないのに、大学生の谷津先輩から見ると俺は「まだ」高校生で、随分自由に見えるらしい。

ひとつ瞬^{まばた}きをして、試合を続ける選手たちに目を向けた。

野球部に交^{まじ}り込んでボールを追いかけるOBは、俺たち高校生より一回り体が大きくて、もうすっかり大人のように見える。

でも俺が大学生になったら、今度は先輩たちが社会人になっていて、そのときはやっぱり「まだ大学生なんだから。」なんて言われるのだろうか。

こんな気持ちをも、もしかすると一生経験するののか。

ボールが三遊間を抜け、わあっと歓声^{かんせい}が上がった。風が吹いて、遠くで聞こえる声が一瞬で耳元に迫^{せま}るような錯覚の後、唐突^{たうとつ}に悟^{さと}った。

(4) 「まだ」は延々と繰り返される。

「もう」遅いなんてことは、もしかするとないのかもしれない。

試合が終わったのは、正午を少し回る頃だった。

最初こそOBに点差をつけられた野球部だったが、後半は開き直ったのか急に動きがよくなって、九回裏は野球部の逆転勝利もあり得る怒濤の攻勢だった。

試合結果は、七対五でOBチームの勝利。

最後に両選手がベンチ前に整列した。互いに向かい合い、礼をする。

俺はそれを、放送機器の置かれたテントの下から見ている。野球部員たちの、悔しい、と、楽しかった、が入り混じった顔を、遠く眺める。

OBたちが監督と一緒に部室へ向かい、残った野球部員たちがグラウンド整備を行う。放送部も撤収作業を行っている、ユニフォームを着た野球部員が近づいてきた。高村だ。

(5) 高村はまっすぐ俺を見て「ちよつといいか？」と声をかけてくる。そばにいた福田先生に目を向けると、軽く頷き返された。

テントを出て、高村とともに校庭の隅へ向かう。グラウンドを整備する野球部員たちの声が薄く響くその場所で、高村はゆっくりと足を止めた。

「今日の試合、ありがとな。」

「……別に、俺は何も。アナウンスも一年に任せっぱなしだったし。」

「OBとの試合を提案してくれたことだよ。」

野球部にいた頃、高村とどんなふうにも話をしていたのか思い出せない。高村が部長に立候補した辺りからぎくしゃくして、会話が減っていったせいもある。

軽く息を吸って、緊張ごと吹き飛ばすように鋭く吐く。

「俺はむしろ、野球部のみんながこの話に乗ってくれると思わなかった。部活やめた俺の話なんて、聞き流されるかもしれないと思ったから。」

「聞き流さないだろ。こんな面白そうな話持ちかけといて、そんなネタティブなこと考えてたのか。」

横目でちらりと高村を見る。ユニフォームが真っ白だ。高村は、今日の試合に結局一度も出なかった。貴重な機会を後輩たちに譲ったのかも。しれない。

(青谷真未「水野瀬高校放送部の四つの声」による)

〔注〕 アンパイヤ——野球の試合で主審を務める人。

シートノック——試合前に行う守備練習。

高村——巖の同級生。野球部部长。

スタメン——スターティングメンバーの略。

福田先生——放送部の顧問。

〔問1〕⁽¹⁾ 自分も口を開きかけて、慌てて閉じる。とあるが、巖が「自分

も口を開きかけて、慌てて閉じ」たわけとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 野球部の一員としての意識が強く残っており、観戦している人々と自然に同じ気持ちになったが、自分の応援を野球部員は喜ばないだろうと思ったから。

イ 野球部に所属していた頃の気持ちに戻って、思わず観戦している人々と同じ反応をしかけたが、今の自分の立場をわきまえないから、ならないと思ったから。

ウ 観戦している人々に自分が楽しんでいる雰囲気伝えたいと思ったが、今回は一年生にアナウンスを任せているので、口出しをしてはいけないと思直したから。

エ 久しぶりに観戦することで改めて楽しさに気づき、また野球部に戻りたい気持ちが芽生えたが、今は放送部に所属しているので戻りづらいと思ったから。

〔問2〕⁽²⁾ ずっと力を入れっぱなしだった肩から、すうっと力が抜けた。

とあるが、このときの巖の気持ちに最も近いのは、次のうちではどれか。

ア 近寄りたがたいと思っていた谷津先輩から自分の野球技術に対して高い評価をもらったので、ずっと続けてきた野球に一区切りがつけられると思い、安心した気持ちになっている。

イ 気軽に話せないと思っていた谷津先輩が意外にも気さくに話しかけてくれて、野球に関する有意義な会話ができたことで、充実した気持ちになっている。

ウ いつも厳しかった谷津先輩から野球にまじめに向き合う様子を評価してもらえたので、後輩の中で自分だけが好印象を残せたと思い、満ち足りた気持ちになっている。

エ 怖いと思っていた谷津先輩が自分の野球に対する姿勢を認めてくれたことが分かり、これまでの取り組みが無意味ではなかったと思い、少しほっとした気持ちになっている。

〔問3〕「⁽³⁾なんで謝るんだよ。いいじゃん、好きなことやったら。」とあ

るが、この表現から読み取れる谷津先輩の様子として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 自分の進む道を自分で決めていく厳のことを温かく受け止め、応援している様子。

イ 最後まで野球を続けなかった厳のことを情けなく思い、適当にあらおうとする様子。

ウ 自分の思いどおりに行動している厳に共感し、自分も厳のように生きていこうと思っている様子。

エ 久々に会った厳が自ら進路を選択して努力している様子に成長を感じ、頼もしく思う様子。

〔問4〕「⁽⁴⁾まだ」は延々と繰り返される。とあるが、このときの厳の気

持ちに最も近いのは、次のうちではどれか。

ア 今後の進路についてはまだ先のことで余裕があると思っており、谷津先輩の言葉にも背中を押され、より時間をかけて考える必要のある問題だと改めて思った。

イ 志望大学への進学が難しそうで追いつめられた気持ちになっていたが、谷津先輩の言葉をきっかけにして、人生はいつでもやり直しができるのだと安心した。

ウ 進路選択について自分なりに考えていたが、谷津先輩の言葉を聞いていくうちに、自分はいつまでも後輩扱いをされているのだと気づき悔しくなった。

エ 進路について考える時期にかなり焦っていたが、谷津先輩の言葉をきっかけにして、何かに取り組むことはいつからでも可能であると思いはじめた。

〔問5〕 高村はまっすぐ俺を見て「ちょっといいか？」と声をかけて

くる。という表現から読み取れる高村の様子として最も適切なもの

は、次のうちではどれか。

ア この日の試合を企画してくれたことについて、放送部全員にお礼を
言おうとしている様子。

イ 野球部を辞めた後の巖が、その後放送部としてうまく活動できている
か気にかけている様子。

ウ この日の試合をきっかけに、気まぎれになっていた巖と二人だけで話
したいと思っている様子。

エ 部活動の後輩を表に立て自分は裏方に徹している姿に共感を覚え、
ねぎらおうとする様子。

〔問6〕 本文の表現の特徴について説明したものとして最も適切なもの

は、次のうちではどれか。

ア 巖の視点を通して会話文や現在形で終わる文体を多用し、時の経過
を表す表現を要所に用いることで、ストーリーがよく語られて
いる。

イ 巖、谷津先輩、高村のそれぞれの立場からの回想場面を要所に織り
交ぜることでイメージが想起しやすくなり、一つの試合の様子を重層
的に描き出している。

ウ 季節を感じさせる描写や写実的表現を複数の登場人物の視点を通し
て用いることで話の内容に厚みが出てきて、イメージが想起しやすくな
っている。

エ 擬人法や倒置法などの表現技法を多用することで読み手が登場人物
への感情移入をしやすくなり、話の中にうまく引き込まれるよう工夫
されている。

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。(* 印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。)

科学はいつも局部しか問題にしない。というよりはせざるをえないのである。現実の事象は、あまりにも複雑にからみ合った関係であるために、そのすべての関係を考えに入れようとするとき、^{*}こんぐらかるばかりでまとまりがつかなくなる。

そこでこう考える。部分が全体を構成しているのだから、部分部分にバラして、単純な形にして考察していこう。このとき部分というのは、必ずしも空間的な部分だけを意味しているのではない。たとえば、磁石に引かれて動く鉄片の運動を考えると、そこには重力もかかっているはずだが、磁力の作用だけを考える。^①物理学は物質の物理的な性質だけを問題にし、化学は化学的性質だけを問題にする。

単純な部分に還元して考えるということは、純粋な状態で考えようということにつながる。たとえば、力学は物体の運動を考えると、その大きさを無視して、質点という点の運動を考える。空気抵抗を考えると面倒なので、真空中の運動を考える。学校で物理学を学んだ人なら誰でも覚えているように、その問題にはやたらに但し書きがつく。マサツ係数はゼロと考えよ、[〃]気圧は一定とする、[〃]温度は一定に保たれていると考える、……。

化学でも、常に化学反応は純粋な物質の間で起こるものとされる。水は常にH₂Oで、いかなる不純物も含まないものと考えられる。もちろん、現実には完全な真空は存在しないし、温度一定の状態もなければ、純粋

な物質も存在しない。

全体が部分から構成されているにちがいはあるまいが、部分において真であることが、必ずしも全体において真であるとは限らない。また、部分のすべてを知ったとしても、全体を知ったことにはならない場合が多い。

野球のチームを考えてみれば、話が早い。メンバー全員の守備がうまくても、チームの守備能力がよいとは限らない。チームの戦力を知るためには、メンバー一人一人の守備能力、打撃能力を知る以外に、チーム全体のチームプレイ能力、監督の采配力などを知る必要がある。

科学は自然(人間をも含む)を対象とする。しかし、それぞれに、自然のきわめて狭い一部しか対象にしない。そのなかでひとり生態学は、あくまでも全体を対象にしようとする。海洋生態学は海洋しか対象としないが、それでも海洋全体を一つの生態系として見ていく。

対象を狭く限定すればするほど、科学は精密になることができる。反対に全体を問題にしようと思えば、あまりにも複雑怪奇、[＊]茫洋^{ぼうよう}としてつかみがたくなってくる。対象を観察し、記述するのに精いっぱい、なかなか相関関係の発見、それから法則の抽出へとは進まない。いわゆる理論体系をつくることなど、困難をきわめる。

^②したがって、はつきりいつて生態学には理論体系はない。生態学の現段階は、生物的自然という巨大な[〃]象^{しやう}を対象に、懸命に観察を積み重ねているところなのだ。

たとえば、倉沢秀夫教授、北沢右三助教授、坂本実助教授の三人が^下北半島の泥炭地を調査した場合はこうだ。

ヨシの草原を、一平方メートルごとに区画して、その植物を全部刈り取る。それを茎と葉にわけて目方をはかる。さらに乾燥させてからの目方もはかってみる。次に、その土を掘り取って、土中にミミズやダング虫などの生物がどのくらいいたかを、一匹一匹数えあげる。次いで、バクテリアがどのくらいいたかも顕微鏡をのぞきこんで数えあげるのである。こうして、土壌中の生物と、その上に生えている植物の相関関係を調べようというのだ。二〇カ所調べるのに一〇日間。それを二年間。気が遠くなるような話である。

あるいは野鳥の食生活を知るために、野鳥の巣のそばに陣取って、親ドリがエサを運んできてヒナに与えるたびに、そのエサの種類と数を調べあげている生態学者もいる。親ドリは一時間に平均一〇回エサを運ぶから、約六分間隔。素早くエサを調べてヒナに返してやらないと、親ドリに見つかってしまう。この調査を丸一日つづける。これまた大変な仕事だ。

あちこちの海水をくみ上げては、それを遠心分離器にかけ、顕微鏡でのぞいてプランクトンの数を数えている学者もいる。

こうした生態学者たちの無数の努力の積み重ねによって、しだいに自然の有機的な構造が浮き彫りにされてきつつある。

(3) 個々の生態学者たちの仕事は、博物誌的な記述に近いものだが、それでも、彼らは少なくとも謙虚に情報を交換し合うことによって、象の輪郭をつかみはじめている。

生態学者たちが、自然のあちこちで発見する相関関係は、まだ普遍的で客観的な法則化できるたぐいのものではない。それはいつてみれば、

治に居て乱を忘れず^{*}といった、古老のことばに見られるような経験の集積が生んだチエに近いようなものかもしれない。

科学も、もとをただせば帰納^{*}に発していることでもわかるように、経験の集積である。しかしそれは、精密化を心がけるあまり、一面的で局部的な経験だけをとりあげて、そこから知識を抽出してくる。これに対して生態学のチエは、経験全体からにじみ出してくるようなチエなのである。

知識が優位に立つべきか、チエが優位に立つべきかは、論を待つまでもあるまい。部分において正しいことが、全体の中で正しいとは限らないからである。

冷暖房にはエアコンが一番。しかし、それをすぎ間だらけの日本家屋につけるのは意味がない。企業の生産計画を、営業サイドの売り上げ見通しだけをもとにしてたててしまうと、回転資金不足のために黒字倒産ということだってありうる。

これからわれわれが学ぼうとしているのは、生態学の与えるチエである。それは他の自然科学の与える知識ほど、もっともらしさはそなえていないかもしれない。

彫刻には、彫像と塑像とがある。彫像は、石材や木材を外から少しずつ削り取って、像を彫りあげていく。塑像は、芯になるものの上に粘土を少しずつ積み重ねていって像を作る。

生態学も他の自然科学も、自然の実像に迫ろうとしている点では同じだが、その態度にこの彫像と塑像のちがいが見られる。どちらも未完成のものであるから、自然の実像は両者のたどりついた地点の中間にあるに

ちがない。だから、内側から外に伸びていく自然科学の知識、あるいはその利用法は、少なくとも、生態学の与えるチエを逸脱してまで外に伸びてはならないということがいえる。(立花隆「思考の技術」による)

〔注〕 こんぐらかる——こんがらがると同意。

茫洋ぼうよう——広くて見当のつかないさま。

目方——重さのこと。

遠心分離器——遠心力を利用して、密度の異なる混合物を分離する装置。

治に居て乱を忘れず——平和な世にいても万が一の時に備え、

準備を怠らないの意味のことわざ。

帰納——いくつかの現象から、共通する法則を導き出すこと。

〔問1〕⁽¹⁾ 物理学は物質の物理的な性質だけを問題にし、化学は化学的性質だけを問題にする。とあるが、どういうことか。次のうちから

最も適切なものを選び。

ア 物理学や化学は、複雑な現実の出来事を考慮しなければならず、その中でそれぞれの特質を問題にするということ。

イ 物理学や化学は、現実の出来事の複雑な結びつきを考慮せずに、単純化した状態の中でそれぞれの性質を考えるとということ。

ウ 物理学や化学は、現実の出来事の複雑な結びつきを考慮せずに、それぞれの関心のある性質だけを研究するということ。

エ 物理学や化学は、複雑な現実の出来事を考慮しなければならず、単純化して問題を考えることが困難だということ。

〔問2〕⁽²⁾ したがって、はっきりいって生態学には理論体系はない。とあるが、「生態学には理論体系はない」と筆者が述べるのはなぜか。

次のうちから最も適切なものを選び。

ア 生態学は、人間をも含む大きな自然を対象とするので、小さく細かな部分は研究しておらず、関係性や法則性を見出せないと筆者は考えているから。

イ 生態学は、自然の全体像をとらえることと、細かい部分の研究もするので矛盾が生じ、関係性や法則性を見つけられないと筆者は考えているから。

ウ 生態学は、自然の細かな部分を観察の対象とし、細部が重要で膨大な情報量になるので、関係性や法則性を考える意味がないと筆者は考えているから。

エ 生態学は、自然を大きくとらえ研究するので、対象を見て記録するのに労力がかかり、関係性や法則性を見つける余裕がないと筆者は考えているから。

〔問3〕 個々の生態学者たちの仕事は、博物誌的な記述に近いものだが、⁽³⁾

それでも、彼らは少なくとも謙虚に情報を交換し合うことによつて、象の輪郭をつかみはじめている。とあるが、「彼らは少なくとも謙虚に情報を交換し合うことによつて、象の輪郭をつかみはじめている」とはどういうことか。次のうちから最も適切なものを選び。

- ア 生態学者たちが今まで小さな生物を地道に観察し続けたことによつて、象のような大きな生物の生態も分かりつつあるということ。
- イ 生態学者たちが努力を積み重ねてひたむきに観察した結果を集積してきたので、自然の仕組みが明らかにされつつあるということ。
- ウ 生態学者たちが大自然の中で発見する関係は普遍的な法則にならないので、あいまいな形でしか伝えることはできないということ。
- エ 生態学者たちが経験の集積によりとらえた大きな自然の姿が、科学によりとらえた小さな自然の姿を修正しようとするということ。

〔問4〕 本文中に出てくる「科学」と「生態学」について、次の①から

⑤はそれぞれA「科学」に関係するもの、B「生態学」に関係するもの、C「『科学』と『生態学』両方に関係しているもの」のどれに当てはまるか。その組み合わせとして最も適切なものは、次のア～エのうちではどれか。

- ① 部分
- ② 全体
- ③ 塑像
- ④ 彫像
- ⑤ 自然の実像

- | | | | | | | |
|---|---|-----|---|-----|---|---|
| ア | A | ①と③ | B | ②と④ | C | ⑤ |
| イ | A | ②と④ | B | ①と③ | C | ⑤ |
| ウ | A | ④と⑤ | B | ①と③ | C | ② |
| エ | A | ①と③ | B | ④と⑤ | C | ② |

〔問5〕 この文章の論理展開を説明したものととして、最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 最初に科学の考え方と生態学の考え方の定義を示し、次に両者の例を挙げながら自然の実像のとらえ方について述べ、最後に両者の優劣について言及している。

イ 最初に科学と生態学の自然の実像のとらえ方について説明し、次に生態学の考え方について実践例を挙げて述べ、最後に両者を比較し共通点について言及している。

ウ 最初に科学の考え方について例を挙げて説明し、次に生態学の考え方について実践例を挙げて述べ、最後に両者を比較し自然の実像のとらえ方について言及している。

エ 最初に生態学の考え方について例を挙げて説明し、次に科学の考え方について実践例を挙げて述べ、最後に両者を比較し相違点について言及している。

〔問6〕 国語の授業でこの文章を読んだ後、「科学にどう向き合うか」というテーマで自分の意見を発表することになった。このとき、

あなたが話す言葉を具体的な体験や見聞を含めて二百字以内で書け。なお、書き出しや改行の際の空欄、や、や」などもそれぞれ一字と数えよ。

4

次のAは、平安時代の歌謡集「梁塵秘抄」について述べたものであり、BはAで述べられる「大鏡」のエピソードの後半部分の原文である。これを読んであとの各問に答えよ。（*印の付いている言葉には、本文のあとに「注」がある。）

A

『梁塵秘抄』には、次のような童謡風の歌謡も収録されています。

いざれ独楽 鳥羽の城南寺の祭り見に

われはまからじ 恐ろしや 懲り果てぬ

作り道や 四塚に 焦る上馬の多かるに

「こまつぶり」は、コマの古い名称。「いざれ独楽」と、コマへの呼びかけで始まるこの歌は、後半の「われはまからじ……」以後が、それに応えるコマの返答になっており、いわば、コマを回す子とコマとの対話風な構成になっているところがミソです。

口語訳すると

(子)「さア来い、コマよ。鳥羽の城南寺の祭りを見に行こうぜ」

(コマ)「いいや、わしゃもう行きとうない。真つ平ごめんじや。

怖くて怖くて、もう懲り懲りじや。作り道や四塚に、暴れ馬がわんさとおるからのう」

とでもなりましようか。

「鳥羽の城南寺」は京都市伏見区にある城南神社の別当寺。九月下旬に行われたその祭りがどんなに盛大で賑わったかは当時の公家の日記などからも窺えます。

とくに、この祭りのアトラクションだった競べ馬（競馬）は、流鏑馬と共にたいへん有名で、歌人の藤原定家も、上皇のお供で見物したことが、彼の日記『明月記』建仁二年（一一〇二）三月二十日の条に見えます。

その競馬に出場するのか、「作り道や四塚」には、「上馬」（跳ね回ル暴レ馬）が一頭や二頭じゃない。それに踏み潰されそうになったときの怖さ、恐ろしさ。いや、もう思い出すのも真つ平だと、コマはばやくのです。

「四塚」は平安京の南大門であった羅城門の跡の辻で、ここから鳥羽へ延長して作られた新道が「作り道」。つまり「四塚」は平安京のメイン・ストリートだった朱雀大路と、鳥羽へ通じる「作り道」との接点であり、これに九条通りが交差していたため、祭礼当日は車馬・群衆でごった返したのでしょう。

この辺りが人の群集しやすい場所であったことは、『平家物語』一門大路渡しの章に「遠国近国、山々寺々、京中の老いも若きも多く来たり集ひて、鳥羽の南の門、作り道・四塚まで、ひしと続いて、幾千万といふ数を知らず」とあることから想像されます。壇ノ浦合戦で生け捕られた平家一門の人々が京に入ったこの日、それを見たさに集まったおびただしい群衆で犇めき合ったというのです。

城南寺の祭り、大勢の参詣客でごった返す道路。その雑踏にいら立って跳ね上がる暴れ馬の恐ろしさ、怖さ……⁽¹⁾コマがつぶやく恐怖の記憶は、かつて祭り見物に行った子ども自身の体験に外なりません。

コマを回しながら、子どもは、その心情をコマに移し入れて自問自答

する。こうしたモノログは、お人形遊びなど女の子の遊びによく見られる光景の一つですが、この童謡の眼目は、そうした童心に添っての巧みな構成にあるといえましょう。

⁽²⁾それにしても、コマと大勢の人でごった返す道路と、どんな関係があるのか。

人馬に踏み固められ、踏みならされた路上こそ、コマ回しの地場として最適であったからです。心棒で立って回転するコマ、つまりコマツブリは、固い、平らな地面でこそ、時間長く、舞姿も美しく回転する。さすれば鎌倉時代の国語辞書『名語記』にも「童ノコマツブリマハス時、地場ヲツクル」とあるように、戸外でコマを回して遊ぶには、まず一定の範囲を地均しし、踏み固めて地場を作らねばならなかった。その点、人や車の行き交う道路、とくに四辻などの片隅は、はじめから踏み固められていて格好の場所だったわけです。

コマは、御承知のとおり最近では専ら民芸品として観賞用になってきましたが、ひと昔前までは男の子に人気の遊具でして、道路や空き地で、寒風に頬つぺたを赤くしながらコマ回しに余念がない腕白たちを、よく見かけました。十四世紀中葉の絵巻『慕婦絵詞』にも、少年三人が、道路わきでコマ遊びに熱中している場面がありますが、こうした風景は、つい先ごろまで日本中のどこでも見られたものです。

「こまつぶり」という名の由来は、高麗（朝鮮半島）から渡来した「つぶり」（コマの古い呼び名。ツムグリとも）、つまり「舶来（とらい）のつぶり」という意味で、古くは貴族たちの遊具だったらしく、⁽³⁾十一世紀後半の

歴史物語『大鏡』は、次のようなエピソードを伝えます。

後一条天皇（二〇〇八〜一〇三六）がまだ幼少のころ、側近に遊具を持つてくるよう命じた。人々はそれぞれに**意匠を凝らしたものをこしらえて進上したが、なかでも藤原行成がコマ紐を添えて献上したコマ**に関心を持たれ、「これは何か？」とお尋ねになる。行成が「これはこまつぶりというもので……」と説明したうえで「回してごらんなされませ。おもしろい物でございますよ」とお勧めするので、帝は南殿にお出ましになってお直しになられた。コマは広い御殿の中を残らずくると回って歩く。それを幼い帝はたいそう面白がられ、それからは、いつもコマばかりでお遊びになられ、ほかの遊具はみんなしまい込まれてしまった……と。

(4) 「こまつぶり」が、幼気な帝をすっかり虜にした光景が浮かびますが、それもそのはず、「こまつぶり」は、当時としては、まだ珍しかった異国からの渡来品で、平安時代には、貴族の間に珍重された遊具でした。もともと、コマその物は古くから全世界に分布していた遊具で、エジプトでは紀元前二〇〇〇〜一四〇〇年ごろのコマが発掘されています。日本でも、時代はぐつと下がりますが、奈良の藤原宮跡と平城京跡から、直径五センチくらいのずぐりゴマ（細い丸太を輪切りにして挿鉢型に削っただけの素朴なコマ）が出土しており、遅くとも八世紀から九世紀前半ごろにかけて、この遊具の使われていたことがわかります。

しかし、「こまつぶり」と呼ばれたこの舶来のコマには、ずぐりゴマにはない心棒があり、しかも『倭名類聚鈔』（日本最初の漢和辞書・九三〇年代に成立）には「孔」があると記されています。むろん、在来のずぐりゴマやどんぐりゴマに孔はありません。

ところで、その「こまつぶりの孔」にどのようなメリットがあったのか？ これについて民俗学者の柳田国男は、「明瞭にし得ないが」と断りながらも「竹や木の空洞の唸りゴマ、音の興味が小児等を引き付けたのであろう」と推測しています。

確かに『倭名類聚鈔』の注釈書『箋注倭名類聚鈔』（一八二七年成立）には、木を削りぬいて中空にしたコマの、大なるものは鐘のごとき音を、小なるものはコガネムシの羽音のような音を発すると解説してあります。空洞にしたコマの本体に孔（窓）をあけ、回転させながら、笛の原理で音を出させるのです。そう、唸りゴマですね。「ごんごんゴマ」ともいい、子どもたちに人気があったので、まだ御記憶の方もいらっしやるでしょう。

〔中略〕

唸りゴマの音色や音の大小は、コマの形・大きさ・孔のあけ方などによつて様々に変化します。これを回して遊ぶ子どもたちは、回転するコマの舞い姿を楽しむだけでなく、コマの発する音響にも耳を傾け、コマの声比べに興じたのです。

冒頭に掲げた「いざれ独楽……」が、コマとの会話、つまりコマが言葉を喋るといふ虚構も、もとはと言えば、こうした唸りゴマの音響に対する興味関心に発するものではなかったか？ と私は想像しています。幼い後一条天皇がこまつぶりにのめり込まれた動機も、コマの、ただくるくる回り歩く姿がおもしろかっただけではなく、それが同時に、不思議な音を出しながら回転するところにあつたのかもしれない。

（中村格「遅々庵ずいひつ」による）

〔注〕 条——条項。

辻——道が十字に交差したところ。

中葉——中頃。

B

*この殿は、こまつぶりにむらこの緒つけて奉りたまへりければ、「あやしの物のさまや。こはなにぞ」と問はせたまひければ、「しかじかの物になむ」と申す。「まはして御覧じおはしませ。興ある物になむ」と申されければ、南殿に出でさせおはしまして、まはさせたまふに、いと広き殿のうちに、のこらずくるべき歩きければ、いみじう興ぜさせたまひて、これをのみ、つねに御覧じあそばせたまへば、こと物どもは籠められにけり。

〔大鏡〕伊尹「日本古典文学全集」による

〔注〕 この殿——藤原行成のこと。

あやしの物のさまや——変わった形のものだ。

しかじかの物——これこれの物。「こまつぶり」を略した表現。

〔問1〕⁽¹⁾ コマがつぶやく恐怖の記憶は、かつて祭り見物に行った子ども自身の体験に外なりません。とあるが、どういうことか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 雑踏の中で人や馬に踏みつぶされそうなコマを見て、子ども自身も同じ体験をしたことを思い出したということ。

イ 祭り見物に行ってみたいと思う一方で、人や馬に踏みつぶされるのではないかという不安をコマに語らせているということ。

ウ ぶつかって傷だらけになって回るコマを見ていると、コマが危険な場所には行きたくないと言っているように思えるということ。

エ 子ども自身が祭りで味わった怖かった思いを、コマが経験したこととしてコマにしゃべらせているということ。

オ 関係があるのか。の一文は、問題提起によって話を展開させる働きをしている。この文以降から、これと同じ働きをしている一文を探し、最初の七文字を抜き出せ。

〔問2〕⁽²⁾ それにしても、コマと大勢の人でごった返す道路と、どんな

関係があるのか。の一文は、問題提起によって話を展開させる働きをしている。この文以降から、これと同じ働きをしている一文を探し、最初の七文字を抜き出せ。

〔問3〕「余念がない」^(a)「意匠を凝らし」^(b)とあるが、本文中で述べられている「余念がない」、「意匠を凝らし」の意味に最も近いのは次のうちどれか。それぞれ選べ。

〔余念がない〕^(a)

- ア 飽きない
- イ 時間を惜しむ
- ウ 熱中する
- エ 取りつかれる

〔意匠を凝らし〕^(b)

- ア 職人に作らせて
- イ あれこれ工夫して
- ウ あつと驚いて
- エ 意見を取り入れて

〔問4〕⁽³⁾十一世紀後半の歴史物語『大鏡』は、次のようなエピソードを伝えます。とあるが、筆者がここで「大鏡」を引用したねらいは何だと思われるか。その説明として最も適当なものを次から選べ。

- ア 身分に関係なく、「こまつぶり」が当時の子どもたちに人気の遊具であったことを示すため。
- イ 「こまつぶり」が、当時は異国からの珍しい渡来品であったことを示すため。
- ウ 後一条天皇が、幼少のころから好奇心旺盛で集中力があつたことを示すため。
- エ 海外交易によって輸入されたさまざまな物品が、当時すでに世間に広まっていたことを示すため。

〔問5〕⁽⁴⁾「こまつぶり」が、幼気な帝をすっかり虜にした光景が浮かびますが、とあるが、「幼気な帝をすっかり虜にした」ことが最もよく表されている部分を、Bの本文の——を付けたア〜エから選べ。

〔問6〕⁽⁵⁾遊具の——とあるが、この「の」と同じ意味・用法で使われている「の」を、次の各文の——を付けた「の」のうちから選べ。

- ア 志望校は姉の通う都立高校です。
- イ 友だちからの連絡はまだありません。
- ウ まだ課題の残りが終わっていません。
- エ この本は私のです。

〔問7〕⁽⁶⁾コマが言葉を喋るといふ虚構も、もとはと言えば、こうした唸りゴマの音響に対する興味関心に発するものではなかったか？ とあるが、どういふことか。次のうちから最も適切なものを選べ。

- ア コマによって異なるそれぞれの音が、人間が実際に会話する時の言葉に聞こえたのではないか、ということ。
- イ コマの音を出して動き回る姿を見ているうちに、コマに命があることを確信したのではないか、ということ。
- ウ コマの音に耳を傾けているうちに、コマに本音を語らせたという思いが強くなったのではないか、ということ。
- エ コマが音を出すことにヒントを得て、コマが喋るといふことを思いついたのでないか、ということ。